

ラグジュアリー：ファッションの欲望

Luxury in fashion Reconsidered

【開催概要】

京都国立近代美術館 東京都現代美術館 京都服飾文化研究財団 (KCI)

開催趣旨

この度、京都国立近代美術館、東京都現代美術館、京都服飾文化研究財団（KCI）は、「ラグジュアリー：ファッションの欲望」展を開催する運びとなりました。

会期は、2009年4月11日（土）～5月24日（日）京都国立近代美術館、2009年10月31日（土）～2010年1月17日（日）東京都現代美術館の予定です。

ラグジュアリー——ファッションはなぜそれに魅了され、常に緊密な関係を保ってきたのでしょうか？

本展は、17世紀から現代までのファッションをラグジュアリーという視点で切り取りながら、ラグジュアリーとファッションが時代や社会の中でどのようなかわりを持ってきたかを考察し、今後の新たな方向を探ります。

ラグジュアリーとは、社会の余剰から生み出される豊かさの一つの形、だといえるでしょう。日本語ではしばしば贅沢と訳されます。

古くから、ファッションはラグジュアリーと深く結びついてきました。視覚的に豪華な衣装や宝飾品は、着用者のステイタスや財力を周囲に示してきました。一方で、服の機能性の高さや快適性といった身体や感覚に訴える要素や、服に表現された、より個人的で知的な遊びにも近い精神的な喜びを満足させる要素も、現代の私たちに豊かな充足感をもたらしています。

現在、私たちは、産業の発展によって物質的に恵まれた生活を送ることができるようになりました。一方でそのために引き起こされるグローバルな諸問題の解決に取り組まなければならない状況にあります。そうした中で、私たちが求める豊かさの現れである〈ラグジュアリー〉に対する考え方も大きく変化しつつあります

本展では、社会の動きと私たちの価値観を何よりも敏感に捉えているファッションを、ラグジュアリーという視座から照射し、再考するものです。

本展は、「モードのジャポニスム」（1994年）、「身体の夢」（1999年）、「COLORS ファッションと色彩」（2004年）に続くカッティングエッジなファッション展として、今年、創立30周年を迎えたKCIの1万1千点を超すコレクションより、ラグジュアリーというテーマのもとに多角的な視点で精選した、17世紀から現代までの作品を展示します。

また、本展は、美術館という文脈の中でファッションは何を語れるのか、その可能性を1980年から追求してきた京都国立近代美術館とKCI、そして1999年のKCIとの共催を手始めとして、ファッションと現代美術の関係性に熱く注目する東京都現代美術館による共催です。

開催要項

タイトル：

ラグジュアリー：ファッションの欲望

Luxury in fashion Reconsidered

[京都会場]

会場———京都国立近代美術館 3階企画展示室

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町

会期———2009年4月11日（土）～5月24日（日）

開館時間——午前9時30分～午後5時

（金曜は午後8時まで開館、入館は閉館の30分前まで）

休館日———月曜（ただし5月4日「祝・月」は開館）

主催———京都国立近代美術館、財団法人京都服飾文化研究財団

後援———文化庁、経済産業省、京都府、京都府教育委員会、京都市、

京都市教育委員会、京都市内博物館等連絡協議会、京都商工会議所

特別協力——株式会社ワコール

協力———メゾン マルタン マルジェラ／このえ株式会社、

株式会社七彩、吉忠マネキン株式会社

認定———社団法人企業メセナ協議会

キュレーター——河本信治（京都国立近代美術館学芸課長）

深井晃子（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）

観覧料———一般／当日：1,200円、前売：1,000円、団体：900円

大学生／当日：800円、前売：600円、団体：500円

高校生／当日：500円、前売：300円、団体：200円

*団体は20名以上、消費税込

*中学生以下、心身に障害のある方と付添者1名は無料

（入館の際に証明できるものをご提示ください）

*本料金でコレクション・ギャラリーもご覧になれます

[東京会場]

会場———東京都現代美術館

〒135-0022 東京都江東区三好 4-1-1

会期———2009年10月31日（土）～2010年1月17日（日）

開館時間——午前10時～午後6時（入館は、閉館の30分前まで）

休館日———月曜（ただし11月23日、1月11日「祝・月」は開館。翌日火曜日閉館）

年末年始（2009年12月28日（月）～2010年1月1日（金））

主催———東京都現代美術館、財団法人京都服飾文化研究財団

企画制作協力—京都国立近代美術館

後援—文化庁、経済産業省（予定）

特別協力—株式会社ワコール

協力—メゾン マルタン マルジェラ／このえ株式会社、
株式会社七彩、吉忠マネキン株式会社（予定）

キュレーター—長谷川祐子（東京都現代美術館チーフ・キュレーター）

深井晃子（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）

観覧料—未定

展示構成

本展は、ラグジュアリーに深く結びつく要素をもとに、4セクションで構成します。

「ラグジュアリーであること」の本質が多様で変化に富んだものであることを示すために、セクションごとに展示方法を選び、17世紀から現代までの服飾品90点を中心に構成し、ラグジュアリーとは何かを考え、その本質を見つめ直します。

■セクション 1 「着飾るということは自分の力を示すこと」——Ostentation

と、パスカルは言っています。かつてから着ることの目的の一つは着る人の富や権力を誇示することでした。高価で希少な品で自らを過剰に飾り立てる行為は、人間の変わることない欲求といえます。一方で、この飽くなき情熱こそが職人を育て、芸術や産業を発展させていったことも歴史的な事実です。

このセクションでは、金糸や銀糸をふんだんに用いたきらびやかな衣装や多くの人の時間と手のわざを費やして作られた豪華なテキスタイルのドレスなど、〈見せること＝顕示〉をテーマとした服を中心に展示します。

■セクション 2 「削ぎ落とすことは飾ること」——Less is more

華やかな装飾が好まれる一方で、近代は行き過ぎた豪華さを避け、シンプルで日常的なスタイルを望む方向へ向いました。とりわけ快適さや機能性がデザインに強く求められている現代において、その傾向は顕著です。それを可能にするのはデザインの造形性、素材に対するこだわりや簡素でありながらも衣服を美しく見せる高い技術力の存在です。

このセクションでは、シャネルの機能的なアンサンブルやバレンシアガの構築的なドレスなど、削ぎ落としたデザインの中に上質さと精緻な職人技が凝縮したオートクチュールの作品を中心に構成します。

■セクション 3 「冒険する精神」——Clothes are free-spirited

ラグジュアリーであることは物質的、金銭的なものだけにとどまりません。「今までにない服」の制作に挑戦する作り手。そのような服に出会い、作り手が込めた情熱を受け止めようと努力する着用者。両者の間に生まれる〈着る〉ことをめぐる濃密な体験もまた、精神的なラグジュアリーであるといえるでしょう。

このセクションでは、ファッションにおける〈美〉や〈洗練〉の価値転換を図ったデザイナー、川久保玲の作品を通じて、衣服の創造性とラグジュアリーの関係性を考察します。

■セクション 4 「ひとつだけの服」—Uniqueness

希少なものには付加価値がつくことは誰も認めることですが、何が希少かの判断は人によって大きく変わります。たとえいつも目にするものでも、ひとたび違う文脈に置かれれば世界にひとつだけの価値ある「unique」なものになりえるのです。これは、大量消費型社会からの転換を目指している現在において非常に有効な考えではないでしょうか。このセクションでは、「一点もの」「リサイクル志向」「ハンドメイド」といった現在のラグジュアリーに結びつくメゾン・マルタン・マルジェラの一点ものの作品を展示します。

主な出展品（予定）

■セクション 1

「着飾るということは自分の力を示すこと」——Ostentation

エリザベス一世にまつわるボディス [17世紀]

シルク・ブロード製ローブ・ア・ラ・フランセーズ [18世紀]

メゾン・ウォルトのレセプション・ドレス [1900年頃]

仮装用衣装：ポール・ポワレの「千二夜」パーティ用 [1910年代]

ウォルト、ガブリエル・シャネル [1920年代]

エルザ・スキヤパレリ、クリスチャン・ディオール [1940~50年代]

ロイ・リキテンシュタイン、ピエール・カルダン、アンドレ・クレージュ、
イヴ・サンローラン [1960年代]

ティエリー・ミュグレー、シャネル（カール・ラガーフェルド） [1980~90年代]

ヴィクター&ロルフ、バレンシアガ（ニコラ・ゲスキエール）、

ルイ・ヴィトン（マーク・ジェイコブズ） [2000年~]

■セクション 2

「削ぎ落とすことは飾ること」—— Less is more

ポール・ポワレ [1910~20年代]

マドレーヌ・ヴィオネ、ガブリエル・シャネル [1920~30年代]

アリックス・グレ、クリスチャン・ディオール、クリストバル・バレンシアガ、
アンドレ・クレージュ [1940~60年代]

イヴ・サンローラン、アズディン・アライア、三宅一生 [1980~90年代]

ランバン（アルベール・エルバス） [2000年~]

■セクション 3

「冒険する精神」—— Clothes are free-spirited

コム・デ・ギャルソン（川久保玲） [1980年代~]

■セクション 4

「ひとつだけの服」—— Uniqueness

メゾン・マルタン・マルジェラによるアーティザナル・ライン [1990年代~]

[出展先]

京都服飾文化研究財団 約 80 点

メゾン マルタン マルジェラ／このえ株式会社 約 8 点

* 東京展では出展内容の一部が変更になる可能性があります。

カタログ

タイトル——『ラグジュアリー：ファッションの欲望』
概要——版型、頁数未定
言語——日本語（論考については日英のバイリンガル）
写真——広川泰士、畠山直哉、小野祐次、他
デザイン——西岡勉
価格——未定
監修——京都国立近代美術館
 東京都現代美術館
 京都服飾文化研究財団
編集——京都服飾文化研究財団（深井晃子、石関亮）
発行——京都服飾文化研究財団

[内容（予定）]

〈論考〉

「序論」——河本信治（京都国立近代美術館学芸課長）
「ファッションとラグジュアリー」——深井晃子（京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター）
「「抵抗」としてのラグジュアリー（仮題）」——長谷川祐子（東京都現代美術館チーフ・キュレーター）
「歴史のなかのラグジュアリー、豪華と快適のあいだで、18～20世紀」
 ——フィリップ・ペロー（歴史学者）
「ゴールドと装飾（仮題）」——鶴岡真弓（多摩美術大学教授）
「真の贅沢さとはなにか」——西野嘉章（東京大学総合研究博物館教授）

〈図版〉 出展作品のカラー写真掲載

〈作品解説〉 出展作品の解説

〈作家解説〉

〈文献目録〉

展覧会関連企画

[京都会場]

■連続講演会

第1回 「花とラグジュアリーについて（仮題）」

池坊由紀氏（華道家元池坊次期家元）

4月18日（土） 14時～15時30分

第2回 「香りとラグジュアリーについて（仮題）」

畑正高氏（株式会社松栄堂代表取締役社長）

4月19日（日） 14時～15時30分

第3回 「オートクチュールにおける職人の世界（仮題）」

オリヴィエ・サイヤール氏（ルーヴル宮 パリ衣装テキスタイル美術館キュレーター）

4月25日（土） 14時～15時30分

会場：京都国立近代美術館 1階 講堂

定員：100名 ＊未就学児の入場はご遠慮下さい。

入場料：無料（但し、展覧会入場半券を提示頂きます。）

申込方法：事前申込制。電話、ファックス、Eメールにて受け付けます。

各回1週間前までにKCI「ラグジュアリー展連続講演会」宛へ、参加希望日、参加者氏名、ご所属、日中連絡のつくお電話番号をお知らせ下さい。

先着順とし、定員に達した場合は締め切りとさせていただきます。

電話:075(321)9221

ファックス:075(321)9219

Eメール:lux@kci.or.jp

お問い合わせ：京都服飾文化研究財団（KCI）

電話:075(321)9221、ファックス:075(321)9219、Eメール:lux@kci.or.jp

[東京会場]

未定